転換点に立つ地域福祉―奥田知志氏に聞く―

山　﨑　克　明

今、地域の福祉のありようは大きな転換を迫られている。その背景には少子高齢化と地域コミュニティの弱体化に対応するため、地域の福祉が「新しい公共」の活動空間に明確に位置づけられ、そこにおける公－民協働の事業としてそれが再構築されることの必要性が高まっていることにある。

そこで、北九州の地で20年以上にわたってホームレス支援に携わってこられ、刮目すべき成果を挙げてこられ、今では日本におけるホームレス支援活動のリーダーとして活躍しておられるNPO法人北九州ホームレス支援機構理事長・奥田知志氏に、活動に対する思いとホームレス支援活動から見えてきた今日の福祉の問題などについて聞いた。インタビューは2010年２月16日、北九州市社会福祉協議会ボランティア・市民活動センターにおいて行った。

１　理事長と牧師　ミッションの共通性

［山﨑］　奥田さんは北九州地域におけるホームレス支援活動を20年以上続けて来られ、今日では九州地域のみならず、日本のホームレス支援問題の中心的リーダーとして大活躍しておられますが、他方では東八幡教会の牧師として、さらに日本バプテスト連盟のリーダーのお一人としても重要な役割を果たしてこられました。そこで、まず、この２つの役割をどのように両立させて果たしてこられたのか、その基本になるお考えをお伺いしたいと思います。

人は一人では生きられない

ホームレスの現場にいたり、厚労省でしゃべっていたり、大学で教えていたり、本業は牧師ですし、それぞれ働きのステージが違うのは、つながっていてまた違うというので、自分にとってはお互いがこう、うまくストレス発散になっているのかもしれません。

ただ、共通していることでいうと、わたしはホームレス問題に対する自分の基本的な立場にしても、クリスチャン、牧師ということにしても、一つ共通していることでいうと、わたしはやはり「人は一人では生きていけない」という人間観で統一されていると思うんです。キリスト教というのは、ある意味人間に対しては実際に非常に厳しく悲観的な人間観を持っていまして、たとえば基本的にいうと罪人というような言い方をしますけれども、それは単に悪いことをするということだけでなくって、人は弱いということですね。キリスト教の基本的な人間観は「人は弱い」ということです。

またわたしは、ホームレス支援を北九州で始めて今もう21年になりましたけれども、この20年間の日本の社会でほんとに一つの大きな問題になってきたのは自己責任の問題だと思います。自己責任社会というのは非常に強い人間観だと、つまり一人で責任を果たして生きていくというのがまともな人間だという考え方に基づく人間観が自己責任論だったと思いますね。ですからそういう状況に身をおけなくなったら、特にホームレスの若者はそう言いますけれども、結局自分が悪い、自分の努力が足らなかったんだというかたちで自分を責めます。わたしなんか見てると社

会的な状況等から生み出されてきている問題が大きいですから、椅子取りゲームみたいに椅子に座れなかった人たちが努力が足らないといくら嘆いても、もともと椅子の数が足りないんだから仕方がないという社会的な状況があります。そういう社会的な状況だけじゃなくって、もっとそもそも問題でいうと、わたしは人間というのは一人で責任を取って一人で生き抜いていくという、そういう自立心とか独立心とかは一方では大事なんですけれども、でも最終的なわたし自身が持っている人間観、これは聖書から教えてもらった人間観ですけれども、「人は一人では生きられない」「人は罪びとである」「人間は弱者である」、だから神様という存在がキリスト教においては必要になる、神による贖いや赦し、キリストの十字架が必要です。同じようにホームレス支援においても「人は一人では生きていけない」、だからわたしたちは社会という、赤の他人が関わるためのシステムを人類は創り出したと思うんですね。だから社会というシステムは、赤の他人が関わるシステム、私ごとに対して全くの赤の他人が関わってくださるシステムだと思ってますので、その点ではキリスト教とホームレス支援というのは、実際に話している人が違いますが、根底において一致しているのは、人は一人では生きていけないし、実際には生きてはいないんだと、自己責任論だなんだといっても現実一人で生きてないでしょという、だからそこが共通されているので、どの切り口からどんな話をしてても、ステージが変わることはあっても、わたしの中では共通した人間観なり人間型がある。だから、わたしには自信があるんです。一人じゃ駄目だという自信がある。だから誰かを必要としている。それは胸を張って言える。おれは一人じゃ駄目だと。

北九州のホームレス支援がうまくいったのも、一人でやってないんで、集団的な解決の仕方をしてる。だからそういうキリスト教における人間観とホームレス支援という社会的な枠組みにおける人間観が極めて共通しているというのは、わたしの中ではあると思うんです。

「自己責任社会論」と自己の責任

［山﨑］　最近利己主義と同じような意味で個人主義が語られ、個人に責任をかぶせるという意味で自己責任が語られますが、もともと個人主義は一人では生きられないというひとのありようを前提にしていたし、自己責任も個々の人格の尊厳との関連で語られていたはずですよね。

まさにそうで、だからわたしは、これはちょっとことば遊びになりますけどね、自己責任論社会には反対だ。一方でわたしは自己責任は重要だと言ってきたんですね。つまり、自己責任論社会というのは、社会そのものが機能停止したときの理屈だと。社会が社会として赤の他人を助けない、周りの者が手を出さないための理由が、それはあなたの責任だという。これは自己責任論。でもたとえばホームレス支援でいうと、わたしはその人に言うんですね。あなたの人生じゃないか。あなたの選択なんだ、わたしたちは手伝うことができても選択はできないんだ。責任取るのはあんただと。

でも実際、家に住んでない、食べ物もままならない、保証人もいない、そういう状況で責任取れといわれても取れないですよね。だからたとえばホームレス支援機構なりという社会的存在があって、その赤の他人のおじさんたちを何とかしよう、お風呂もはいれるようにしよう、ご飯も何とかしよう。その上であなたは自分の責任、つまりハローワークに行きなさいよと。それで行かないんだったらそれはあんたの責任だといってきた。だから、個人の責任論がいけないという

ふうには思ってない。逆にいったら、自己責任社会論は、一見個人の責任を重んじているように見えるけれども、実は個人の責任を果たさせないシステムだと。だからいい意味で個人の責任を追及していくためにも、社会が社会的責任を果さないと駄目だと。そこをどう押さえるかということだと思うんですね。

たしかに、わたしはじゃあ社会的責任が強くなりすぎて、全体主義、国家主義に傾注していくのかというと、それはやはり考えなければいけないと思う。だから先生のおっしゃる個人の成立と社会の成立というのは両輪になっていないと、みような全体主義的な社会主義というのは非常に恐ろしい。だからわたしも自分でしゃべっているとき時々自戒するのは、日本的文脈でいうところの家族や家庭、ホームいうことば使いは、実はもろ刃の剣で非常に危ない。じゃあかつての家族主義がよかったのか、家族主義社会がよかったのかというと、それは近代女性史から子供の権利から含めてやっぱり歪めたわけですから。だったら、もう一つ別の、オルタナティブな共同性としての新しい社会、新しい公共みたいな議論が今ありますけれども、その議論に踏み出さないと懐古趣味で終わるんじゃないか。そういう意味ではホームレス支援から見えてきた新しい公共というのは、赤の他人という概念は非常に大事で、赤の他人という非常に否定的なことばなんだけれども、その赤の他人がなお公共性を保持するためには、議論をそこでしていかないと、地域社会や身内という地縁や血縁に戻ってしまう共同性とか社会性というのはいかがなものか。だからなにか新しい枠組みというのがどこでつくれるかというのを、すごく模索しているんです。

2　ホームレス支援活動の基底にある理念

［山﨑］　奥田さんが理事長をなさっている「NPO法人北九州ホームレス支援機構」の活動は昨年20周年を迎えました。その基本になっている考え方の一つは、いまやわが国におけるホームレス問題の基本概念となりつつある「ハウスレス」と「ホームレス」という捉え方であり、視点です。これは昨今わが国で論じられるようになった「無縁社会」論の先駆をなす社会問題へのアプローチであると思います。今ひとつ重要な問題への接近法として、トータルサポートという方法を示しておられます。そこでまず、これらの点を含めて、先生は支援活動をどのように捉えてこられたのか、その基底にある哲学、理念をお聞かせ下さい。

「ハウスレス」と「ホームレス」

牧師になって５、６年たったときですね。神学部時代からの恩師寺園喜基先生から九州大学の博士後期課程の受験を勧められ、合格してそこで牧師をやりながら勉強することになった。そのときに寺園先生から神学的抽象化ということをすごく言われたんです。おまえは現場があるだろう。現場でやっている牧師だしホームレス支援もあるだろう。それを神学的に抽象化しなさい、言葉化しなさい。それがおまえのもう一つの課題なんだと。現場で起こっていることを理念型に換えるとか抽象化していく、言葉化するということを先生から叩き込まれたんですね。しかも、寺園先生がおっしゃったのは、神学的抽象化の作業は即ち普遍化の作業であると。おまえが現場でやっているのは内在的な現場そのもの。内在的なテーマを普遍的なテーマに換えていくというのがおまえの仕事だと。そして、普遍的なテーマをさらにまた内在化させていくというのが、現場と言葉化の緊張関係だと。当時はまだあまりよくわかりませんでしたけれども、でもまぁ、ずっとそのことばだけは残ってて、自分なりにやってきたんですね。このごろよくうちに取材と

か研究者の方とかが来られるんですけれども、全国でもこれほど言葉化し概念型をちゃんとつくっているNPOは少ない、それで広がったんでしょうねというような言い方をされました。

それともう一つは、「ホームレス」「ハウスレス」。「ホームレス」「ハウスレス」に関しては、当初は当然何もありませんでした。わたしの目に映ったのは単純に路上で困っている人。そして命を侵されているという、その問題がありますね。しかし、すべては実は路上の方々から教えてもらったわけでありまして、一生懸命頑張ってアパート設定して、まあこれで何とかなったという安心感、当事者にもあるしわたしたちにもありますよね。でも、アパートを訪ねて行って話をしてると、明らかに路上時代と変わったこと、アパート暮らしで変わった部分と、アパートに入ったにもかかわらず、彼自身が醸し出している空気みたいなものが、アパートに入る1，2週間の空気と変わらないものがある。これはいったい何なんだろう。現に、例えば路上状態でおられる方が、奥田さん、おれ畳の上で死にたい、と。これはしばしば聞きましたね。しかし、じゃあ、アパートに入ったらそれが解決がつくか、もう安心できるかというと、アパートに入った段階で、ここから本当に人間的な問いが始まる。それは何かというと、おれの最後はだれが看取ってくれるかという問いだったですね。ですから、畳という物理的問題と誰が看取ってくれるかという人格的な問いという、2つの問題がそこにはあったというのが、やはり大きかったですね。

ですから、そういう現実を見たときに、今日の社会に餓死と孤独死という2つの貧困、2つの困窮の問題がある。生活保護が出るようになってこの問題がすべて解決したのかというと、わたしはやっぱりそうじゃないと思ってまして、そういう現場の、畳の上で死にたいとかだれが看取ってくれるかとか、もしくはお弁当をもらっていた人が、正月と8月、路上で亡くなって家族の引き取りがなかった人たちを追悼する集会、そういう追悼集会の後に、今でも私の部屋に貼ってますけれども、ぼろぼろの紙きれに親の名前と自分の名前と兄弟の名前と、自分の生年月日とを書いて、「もし何かがあったら頼む」といって託していかれる方がおるんですね。実際わたしらずっと一緒におるわけじゃないから、そんな紙切れ、メモ用紙をもらっても、その方がどこでどうなるかなんてわからないわけですから、責任取れないわけですよね。でもその思いは、今日食べれるか食べれないかだけではなくって、自分の存在というもの、この社会における自分とこの世のつながり、それを、もしもの時は頼むといって紙切れに書いて。そういう人間の姿を見たときに、問題はハウスの問題だけじゃないんだ、ハウスという物理的問題だけではなくって、まさに「ホームレス」なんですね。それは、ハウスは家をはじめとする物理的な条件が欠落している。家がない、食べ物がない、着るものがない、就職がない、お金がない。でも、同時に彼らがほしがっているのはホーム。心配してくれる人がいない、戻っていく場所がない、いざというときに相談できない、そういうホームを失っている、そういう人たちなんです。だから、「ハウスレス」が解消されても安心して死ねるかといったら死ねないという、そういうところで支援の枠組みがだんだん見えてきた。わたしよくいう話ですけれども、小倉北で中学生による襲撃事件が多発し、夜中1時とか2時に中学生が襲いに来る。その事件の時にホームレスの当事者が、ほんとに石投げられてつらいという話をされた後に、「でも夜中の1時とか2時にホームレスを襲いにきている中学生というのは家があっても帰るところがないんじゃないか。親はいるけれどもだれからも心配されていないんじゃないか。帰るところのない奴の気持ち、誰からも心配されていない人の気持ち、俺はホームレスだからわかるけどな」とおっしゃった。それは91年か2年の事件だと思いますけれども、それがわたしにはもう決定打で、中学生もホームレスなんだというの

を知ったんですね。

そこで、ホームレス問題とハウスレス問題は２つの切れないものとしてあるんだということを言い出した。いまや20年以上こんなことを言ってますから、うちのスタッフからほとんど古典落語だと言われているんですけれども、そこで寺園先生がおっしゃった普遍化の話になってきて、ホームレス、野宿者というところから「ホームレス」という概念的な抽象化をしたわけですね。そして抽象化の作業をしたときに、ある意味普遍性が出始めて、わたしのような拙い話をどこかで聞いた、もちろん家持ちの人たちが、「僕自身がホームレスやったんかもしれん」という、そういうイメージ。さらに無縁社会の中に生きているという現実と普遍的につながっていくんだということ。北九州のホームレス支援の面白さは、野宿の人を助けるということにとどまらす、多くの人たちが、この社会がホームレス化しているという、その問題点が立ち上がった。ここ最近、社会保障の研究会に呼ばれて話しているよりも、子育て講演会だとか地域の講演会なんかに呼ばれて話をして、子育て講演会なんか聞いてるのはほとんど子供連れのお母さんの世代ですが、みんな「わたしのことかもしれない」と感想なんか書いてます。ですからこの時代自体がホームレス化している。

現に、野宿者を見ててほんとに思うのは、もっと早い、野宿になる前の段階で止められたんじゃないかと思われるケースが多いわけです。たとえば多重債務問題を取ってもそうです。もっと早い段階で誰かに相談していればその問題はほとんど解決がつきますから。ですから多重債務問題を苦にして残念ながら自殺される方も後を絶たない状況ですけれども、多重債務には人を殺す力はないと思うんですね。結局何が人を殺しているかといったら無縁と無知ですね。地域においては無縁化した人たち、もしくは知るべき知識を手に入れることができなかった人たちですよね。無縁と無知が地域にある限り野宿化してしまう、もしくは自殺してしまう人たちが後を絶たない、という現実。そういう意味で北九州のホームレス支援運動が問いかけた問いというのは、残念ながら、今日の社会においては非常に普遍的なテーマになってしまっているわけです。このように言えるんじゃないかと思います。しかも、野宿者問題だけで考えてもですね、止められる段階で止めない限り野宿者は増え続けるわけですから、根本的に野宿者問題を解決するためには地域のホームレス化をどう止めるか、地域の中で「助けて」と言えるかどうか、これがもう決定的だと思いますね。

３　エポック・メーキングな出来事

［山﨑］　支援機構の活動を振り返ってみますと、行政と対決しつつおもに炊き出しないし配食サービスを通して相談活動を行っていた時期から、マスタープランを作成してより総合的な支援を目指して自立生活支援住宅を開設・運営する段階へ、そしてNPO法人格の取得、ついで行政との協働関係を構築し、「ホームレス自立支援センター北九州」の運営を受託し、さらには「抱樸館下関」に始まるいくつもの自立支援施設の開設へと活動が拡大してきています。それと共に自立生活を回復した人たちの数もすでに800人を超えています。それと共に自立を果たした人たちがどのようにして地域社会での生活に復帰するかということが、今日の重要な課題の１つになっていると思います。

北九州ホームレス支援機構の活動の軌跡をわたしなりにこのようにたどってみましたが、この20年を振り返ってみられて、奥田さんが特にエポック・メーキングであった、重要であったとお考えのことをお聞かせ下さい。

2000年８月の決戦と浦野さんの一言

そうですね。個別の出会いでいうとすごく劇的なものがいっぱいあって、忘れられない人がいっぱいおるんですけれど、全体の話でいうと、特に行政協働への一歩というのは相当高いハードルでありまして、最初の10年間は本気で北九州市と闘ってました。だけど、エポックでいうと2000年８月に北九州市といわば最後の闘いに挑むんですね。

あの頃は、わたしたち、どこで炊き出しやっても、２ヶ月もすると車止めが設置されて炊き出し場所に車が入れなくなって、もう本当にいたちごっこをやっていたわけです。行くとこ行くとこ追い出される。わたしはもうほんとに頭にきまして、市庁舎でやりだしたんですね、炊き出しをついに。ここなら車止めを作れないだろうということで。それが２年ぐらい続きましたかね。ちょうど紫江ズさんができた頃で、マイリバー・マイタウン計画の第一期がちょうど仕上がろうとしていたころで、議会の記録の中にもめざわりなんていういう発言が出ていた。ある会派の重鎮が奥田だけは絶対許すなという話になってですね。中には若い議員で心配してくれて、「奥田さん狙われてるぜ」と言ってくれる人もいた。わたしもあの頃はまだだいぶ血の気も多かったですから、やってみろと……。

その年の８月に結局炊き出し排除ということになったんですね。ただこっちももう引けない。やっぱり、人間てね、歪むんですよ。そして現実に目の前で人が死んでいくわけですよ。あの頃やっぱり路上死が年間でいうと10人から20人ぐらいいましたから。やり場のないような怒りというか情けなさというか、恨みじゃないけど、なんというかなぁ。一方では自分たちは何をやってたんだという、自分たちの責めもある。しかし、一方ではやり場のない怒りをどこにぶつけるかという、スケープゴートみたいなものもあったんだと思うんですけれども、それはやっぱり行政が悪いんだという理屈になる。僕らは10年来ずっとホームレスのためのシェルターを作れとか、住所がないという理由で生活保護を却下するのは違法だとか、ずっとやってきたわけです。けども、その頃わたしたちが市庁舎の下に入った瞬間に、あの当時８階だったかな、保護課が、そこにもう一切誰もいなかったですよ。後で課長になられた方々に聞いた話では、来るとわかっている日には全員昼から退庁を命じられて、別室にこもっていたといいますもんね。だから一番偉いさんでも係長さんぐらいしかいないという中で交渉してました。

そんな中で2000年８月の炊き出し排除があって、僕らももう引けないということで「やる」、と。あの時は、もう、逮捕するという話にもなってて、ある親しい議員さんから、「今日はもう小倉北署に動員がかかった。制服私服合わせて来てるし、目標はあなたですよ。今日は出ないほうがいい」と。だけど、学生ボランティアなんかはみんな来ててわたしが行かないというわけにはいかない。で、行きました。逮捕されてもいいから、逮捕されたら逮捕されたときに、裁判所でもなんでもいいから、食えない人に弁当配って逮捕されたら本望だと思って、「やろう」という話でやったんですけれどもね。それはもう、ほんとにすごかったですよ。あのときの向こうの大将は岡田助役ですよ。その後岡田さんは社協（北九州市社会福祉協議会）に行った。そして岡田さんが社協の会長のときに自立支援が始まる。だから本当に面白い、奇しき出会いなんですけれどもね。

でもね、そのときに２つあって、ひとつは、わたしギリギリまでうちにこもって情報収集していた。そしたらね、いよいよもう家を出る時に市の幹部の人から電話がかかってきたんです。しかもホームレス担当をしているような幹部の人です。その人が「わたし、どこどこの誰々です」

と。「はい奥田ですが」といったら、「今日は一人の人間として、個人として掛けました」といって、自分の思いを語ってくれたんです。あんたたちの言っていることは決して間違ってはいないということとか、今市がこういう体制を取っているとか、市の中にも動揺が走って、こんなことしていいのかという声が実はあるんだとか、決定的だったのは、その日末吉さん（当時の市長）がいないということが分かったんです、その電話で。トップがいなくってこんなに大事になってマスコミが来て大騒ぎになってるから、もう責任取れるのかという話になってるとかね。僕ね、そのとき、ああ、やっぱり人間ていいなあって単純に思ったんです。なんか立場立場でみんな動いているけれども、一方で、今日はわたし一人の人間として掛けたといって掛けてきてくれた人、心配してくれているんですね。

その電話が終わって、わたし、もう引けなくって、もうやるといって行ったんですね。そして市と対立して。もう、けんか腰です。あの頃わたしはもう、あれでも牧師かって言われるぐらい口も悪いし、関西弁でぼろくそやってました。そのときに、最初は総務課が出てきて、それ突破するんですね。次に公園局が出てきて阻止する。公園局の人たちとこうやって向かい合ってやってたんですよ。そうしたらね、その年の３月にアパート設定して自立した浦野さんという、小倉駅で寝ていたおじさんが出てきて、「あなたたちは何をしてくれましたか。わたしが食べれない日、寒さで凍えていたとき、何をしましたか」といって、今度は僕らの方を指差して、「全部やってくれたのはこの人たちだった」と。「あなたたち何しましたか」といったら、一瞬ひるんだんですよ、公園課の人たち。それはすごい勢いだった。涙流しながらネ、「あなたたちにこの人たちを阻止することはできない。すべてやったのはこの人たちだ」と。

でもね、実はね、「全部やったのはこの人たちだ」というあの言い方に、そのあとすごくとまどったんです。つまりね、全部やってない。どっかに市が悪いんだ、市がやるべきことをやってないからこうなってるんだという、何かこう、自分たちは自分たちのできることだけをやろう、この部分はどっちみち市がやるしかないんだ、という発想。たとえば施設を構えてやるということは行政が本来やるべきだという。だから、知らず知らずのあいだに、行政が悪いから人が死んでいるんだ、路上で人が死ぬのは行政が何もしないからだという、その論理にはまってたんですね。

自立支援住宅の開設とグランド・プランの策定、そしてNPO法人化

でもね、浦野さんに「この人たちが全部やってくれた」といわれて、そのときは興奮しているから何も思わなかったんだけれども、そのあと、悔しいからその日の記録を出すんですよ。緊急出版として冊子を。それを全国にばら撒いた。その日に何があったかということを、ちゃんと印刷屋に出して本つくって。その編集作業にすぐ入った。これを記録に残さないかん、このことはあいまいにしちゃいかんと。それをずーッと書き起しながら、全部やったかなあ、なんか理由をつけて、結局はやれることもやってなかったんじゃないかなぁ、ほんとに胸を張って全部やったといえるかなぁ、行政の責任にして、自分たちの責任をどっかこう制御していたんじゃないかなあという、そんな思いになった。そして、よし、もう行政との闘いにエネルギーを使うのはちょっとやめじゃと。そんなエネルギーがあるんやったら全部野宿の人たちにくれてやると。すべての時間をくれてやると思って、それで、そこから一気に自立支援住宅の発足に向かうわけです。

それが８月の時点で、そこからお金集めに入って150万円ぐらい集めたかなぁ。みんなで出し

て。そしてアパートを５室借り上げるんですね。一軒借り上げるのに２,30万かかりましたから。敷金とかなんとか入れると。それで５室借り上げて翌年の５月にオープンさせたんです。その８月から５月の間に、実はグランド・プランは書く。実際には９月か10月になって書き始めたから、その２,３カ月でグランド・プランを書き上げて、同時に自立支援住宅をやる。

ホームレスの人から見たら、行政の人が助けてくれようが市民が助けてくれようが支援団体が助けてくれようが、そんなことはどうでもよいんだ。わたしたちは何のためにこれをやっているのか。ミッションじゃないか。自分たちの運動のプライドとか、自分たちの気持ちがよいとか悪いとか、行政をやっつけたとかやっつけなかったとか、そんなことはどうでもいいやないかと。目的をはっきりさせて「使命」というものを立てる、ということで、現在の使命の明確化とかグランド・プランとか、プログラムとしては支援住宅。つまり10年ぐらい市に対してつくれと言ってきたシェルターを民間で開始する。で、僕の中でも実はグランド・プランと銘打った時には、民間と行政という枠をのけて、北九州としてはこれが必要なんだという、まず大きな１つのテーブルを明示化しようとした。最終的にはここを企業が担当する、そこは行政が担当する、ここは民間が担当するというかたちになればいいと。だからホームレス支援機構ですべてやるということではなくて、全体をまずは明示しようという。僕にとってはホームレス支援の最初８年間はずっと聞き取りばかりやっていましたから、あの１年間は、その聞き取り記録を全部洗って、何が問題だったのかという話をして、そしてNPO法人化したのも実はそっからなんですよ。すべては８月の闘いに敗れたという、しかもあそこで、浦野さんのひと声、「この人たちが全部やってくれた」という、あれが痛かったですね。やってないなぁと思ったんですね。

<u>行政との協働</u>

日本のNPOと行政の協働のスタイルを見てると、ほとんど行政が立案・予算・実施までやって、最後の実施委託でNPOに投げるという下請構造がある。これがNPOを弱らしたと思うんですね。北九州の行政協働のよかったのは、民間がまずゴールド・プランを描き、そして官民協働のテーブル設定をやり、そこをベースにして一緒に市の実施計画をつくるという、立案段階からの官民協働のスタイルの中でやっている。そうなるとNPOもただの下請じゃない。自分たちの言ったことが形になるから責任感が全然違うんですね、面白さも。

ただ、最初蓋を開いたら社会福祉協議会が受け皿で、うちが下請けになったというのがあって、それはちょっと誤算だった。でも今から見ますとね、あの最初の５年間がなかったら今がないと思いますね。やっぱり僕らにはあの頃、あの時点でNPOにすべて投げるということは、もうほとんど不可能。そしてそもそもこれをNPOとの協働でやって本当に大丈夫かというのが市の中に蔓延していた。でも揺るがなかったのが末吉市長、岡田助役、あのあたりが動かなかった。駒田さん（局長）ですね、それと。この３人が「行け」という大号令を出したんで、ここまで来たんだということを藤村課長が言ってました。本当にお互いが信用していいのか。僕らも実は怖かったんですよ。市に飲み込まれるんじゃないか、うまいこと使われるんじゃないかと。

わたしはやはり内部的には相当批判されました。でも、それこそNPO法人になるときも、みんなが議論して反対もあって。でも、あのときミッションを明確にして、最後に、ホワイトボードに「立ってるものは親でも使う」と書いたんですね。「何にこだわってるんや、おまえらは。おれはもうこれでいくから。立ってるものは親でも使う。行政協働もありや。野宿のおっさんが

助かるんやったら誰にでも頭を下げに行くわ」と。

2000年８月のあの浦野さんの一言は、応援してくださったことばの中に一番強烈な批判が込められていた。正直言ってそれまでの10年間、行政は座り込もうが何しようが話すら聞いてくれなかった。だから、５月に支援住宅を開所をさせ、その年の４月に課長が代わるんですね。それでわたしは方向転換というか方針転換をした。こっちからあいさつに行こうといって、ちゃんと背広を着て行って、藤村課長に名刺を渡した。そしたら藤村さんは初めて「どうぞ」といって奥のテーブルに通してくれて、スタッフの人にお茶を出しなさいと。それも藤村さん、こないだ言ってましたけれども10年間で初めてだった。藤村さんという、これもきわめてまれな人格者と出会ったということもありました。

だから８月から翌年５月の間に大分ものを考えたし、大分動きましたね。あれが大分変わった転換だったですね。

４　「抱樸館」について

［山﨑］　ホームレス支援機構の活動の軌跡の中で、「抱樸館」の重要性が、今後ますます大きくなってくるように思えます。そこでまず、「抱樸館」という名称の由来とその目指すもの、特に今度北九州でつくる抱樸館についてお聞かせ下さい。「自立支援センター北九州」との関係あるいは違いはどこにありますか。

「抱樸」の思想

まず抱樸館ということばはオリジナルではありません。もともとは老子の言葉ですけれども、わたし学生時代に住井すゑさんの著書で学んだことばで、住井すゑが自宅の中に「抱樸庵」という建物を建てて、そこで解放学習をずっとしてたんです。そこで住井すゑが抱樸の考え方をある本の「あとがき」に書いておりまして、学生のときすごくそれに共鳴したんですね。すごい思想だと。それからずっと長く頭の隅っこにあったんですけれども、実は、北九州の自立支援センターができたときにニックネーム募集というのがあって、関係者に募集した。それはなぜかとうと「ホームレス自立支援センター」というと就職活動をするとき支障が出るというので、対外的には電話番号が２つあって、就職先から掛かってきたときに出る一般の住宅のような電話番号を一個つくってたんですね、就職用に。そのときにニックネームの募集があって、わたし「抱樸館」として応募した。そしたら、保護課の会議でこんな難しいのはあかんといって一蹴された。それでなんに決まったかというと「小倉荘」。分かりやすい。で、わたししょげてたんですよ。そしていよいよ「下関抱樸館」。これも話すと長いんですけれど、ある方が土地と建物を下さるというんでね。わたしはあの頃これはラッキーと思ってもらったんですけれども、まあしかし、ただのものほど高いものはないので、改修に１千万円以上かかるという話になって、横が土手でのり面があったりとか、下に住宅があってこれが崩れたらどうなるんやろとかね。そんなこともあってちょっとノイローゼみたいになったこともあって、いろいろしたんですね。

そこで、今度の新しい下関の施設ですけども、自立支援住宅でやるかというときに、うちのスタッフが、「昔理事長が言っててボツになったあれどうでしょうか」と言ってくれて、それで復活するんです。そのときに「抱樸」ということば自体は住井すゑさんから教えてもらったんだけれども、それに実はちょっと理念的ないろんなことを書き加えたんですよ。で、「抱樸」には２

つの概念があって、一つは「樸」というのは原木、荒木のことなんですけれども、「原木をそのまま抱き止める」という発想なんですね。ですから製材所に運ばれて整えられたら受け止めるというんじゃなくって、山から切り出された原木をそのまま受け止めようと。このあたりは住井すゑも書いている。

もう一つ、キリスト教的な発想なんですが、山から切り出された原木を受け止めるというのはとても大変な作業で、それはホームレス支援を十何年やってきた実感で、抱きとめられる方も大変なんだけれども、抱きとめる方もやっぱりトゲが刺さったり傷ついたり、いろんなことが起こるんですね。やっぱり人が立ち上がっていくときには、多少傷つく覚悟が必要です。受け止めてくれる人がいないと人は復活できない。これはきわめてキリスト教的な発想です。やっぱり十字架というものが新しい命の始まりだと。「抱樸館」の由来の中にはそのようには書いてないんですけれども。でも、例えばお母さんが新しい命を生みだすときにも死ぬような思いをして生み出しているんで、それを嫌だと言い出したらだれも生まれていない。特にわたしが書いた「抱樸」の理念の強調点は、ある意味傷つく人が必要なんだという設定なんですね。誰かが元気になるためには多少傷つく人が必要なんだと。

だから、そういう意味では「抱樸」の理念に込めた思いは荒木をそのまま抱くということと傷つく人が必要なんだという、その二つなんです。今日の社会においては先ほどの自己責任論に戻りますけれども、それは、周りが傷つきたくないという思いの結論だったと思うんです。なまじそんな人とかかわったら傷つくから、それはあなたが頑張るしかないんだと言いきることによって、わたしはあなたのために傷つくつもりはありません、それはあなたの問題でしょうと、そういう風に突き放す論理、無責任の論理だったと思うんですよ。そういう時代だからこそわたしが「抱樸」という思想に込めた思いは強い。僕なんか、僕のために時間をとってくれるとか、僕のために泣いてくれるとか、僕のために傷ついてくれるとか、そういう人を必要としてるんですよね。だから一人では生きていけない自信はあります。そういう意味では、「抱樸」という思想はとっても大事で、赤の他人のネット社会である限りはだれかが傷つく。

わたしはこのごろよくいうのは、社会的リスク・マネジメントということです。それは一般にはいかに危険を回避するかとか、事故が起こったときにリスクをいかに最小限にするかということですけれども、そうじゃなくって、人間が一緒に生きていくためには必ずリスクが発生する。そのリスクを社会的にコーディネートしていく。多くの人たちが死なない程度に傷つくということを社会的にコーディネートするシステムが必要なんじゃないか。従来の日本社会はそのリスクを個人ないし身内が全部引き受けてたんですね。だからね、わたしホームレス支援を20年見てきて、あなたの弟さん危篤ですよと電話したときに、「もう二度と顔を見たくない。そっちで煮るなり焼くなりしてくれ」といって迎えに来ない。そんな人たちが路上段階では８割、わたしたちが支援して遺体の引取りがあるのは５割です。だからやっぱりある特定の人にリスクが重なっていくというのは自己責任論社会だったし、かつての家族主義、身内主義、身内の責任論ですよね。これをやってる限りは身内はつぶれると思うんですよ。変な話ですけどね、兄弟が借金の肩代わりで500万円かぶったら、もう二度と顔を合わしたくないというかもしれないけど、たとえば5000人の人が1000円ずつかぶったとすると許せるかもしれない。それをマネジメントしていくのが社会なんだと思っているんです。だから「抱樸」の思想というのは、身内というものには帰れなくなっているこの社会で一緒に生きていくためにはリスク・マネジメントが必要だ、こう

いう発想が「抱樸」の思想に新たな発想として加わった。

そのまま抱きとめるというのは、もともとホームという発想の中に持っていた。しかし、一方で支援というのは実際に厳しい、大変なんだと。20年の経験知からも、やっぱり支援するときにはちょっと覚悟がいりますよと。でも、一人、二人がそれをやろうとしたらつぶれちゃうから、社会的なチームでやりましょうやというのが「抱樸」の発想なんですね。

「抱樸館北九州」と「自立支援センター北九州」との違い

今度北九州で起こそうとしている「抱樸館北九州」と「自立支援センター北九州」との違いは、「抱樸館北九州」は野宿者に限定しないで、抽象的に概念化したところの「ホームレス問題」に応えようとする。言い方を換えれば地域で困窮孤立化した人たちを対象とする。困窮化していてなお孤立化している人たちの地域福祉の拠点にするというのが１つの大きなコンセプトです。ですから地域社会の中で孤立化している人たちの支え合いのシステムをそこでつくっていく。今のことばでいったら、「抱樸」というものを形化していくということですね。

「ホームレス自立支援センター」は自立支援に非常に特化されたシステムなので、どちらかというと生活支援とか人生支援という枠ではなくって、無職状態から就職へ、宿無し状態から居室・居宅へ、そういう状態の変化を促す枠組みだと思うんですね。しかし今回の抱樸館は、人生支援とこれまでいってきたことを名実ともに明らかにする。看取るまで、亡くなるまでやるということ、もしくは日常生活のレベルでどう支え合いのシステムをつくるかという、それをやりたい。特に今回はですね、地域共済会というのを実はつくろうと思ってるんです。共済会に加盟する人たちをベースに広げていって。

一つは、入所施設でもあるんですけれども、一階部分に食堂をしようと思ってましてね。今の介護保険でいうと、弁当の宅配はとても助かるんだけれども、家から出ないシステムになってしまうんで、家から出てきてもらう。健康な人は。たとえば共済会に登録してててお昼ご飯を注文してた人が来ない、一週間顔を見せない。そうするとアフター・ケアで、即、孤独死防止を含めてケア体制をつくるとか。

あと、もう一つ、野宿者で自立された方々の次の問題というのは、だれが最期を看取ってくれるかという、お葬式の問題が起きます。わたしね、共済会の中でね、たとえば介護保険でもカバーできないニーズってあると思うんですね。たとえば、買い物にはいってくれるけれども、たとえば電球が切れたから買い物に行ってくれといったらいってくれるけれども、電球を換えてくれ、これは介護保険の対象じゃないとか、いろいろ難しい。その辺を共済会の中で、たとえばうちの自立者で「仲間の会」という互助会をつくっているんですけども、元気のいい人が一杯いるんです。彼らのお互いの支え合いのシステムをうまくつくってね。ポイントためて、最終的には100ポイントたまったら葬式を出してあげますというような。そして、どうしても働けない人もいるでしょ。働けない人には香典の代わりにみんなが星二つずつ、死んだときに集める。そして100ポイント集めて無縁仏にしないみたいな。また、わたし、いまグリーンコープにかかわってるんで、その生産者さんたちにも頼んで、商品にならないものがいっぱいあるので、そういうものを共済会で販売して、活動の財源にする。当然NPO（支援機構）の中には共済会はつくれないんで、別立てのものをつくろうとしているんです。

介護事業も今検討に入っている。なぜかというと、自立した高齢者がもう250人ぐらいになっ

ています。ですから彼らの、介護保険は今でも地域の介護保険を使ってるんですけれども、やっぱり家族がいない人、孤立の人で、しかもホームレスやってて云々というと、なかなかうまく使えない。いざとなったら全部うちのサポートセンターに来るんですよ。だから結局うちのサポートセンターが乗り込んでいってやっている。だったらもう、介護とサポート事業を一体化したような地域をつくろうかというので、今介護保険事業の検討に入ってて、今年の秋ぐらいに多分立ち上げすると思うんです。

そういうすべての機能を持ったのが「抱樸館北九州」。できれば、地域というコンセプトを持っているんで、野宿者だけだと大体58,9歳あたりからの平均年齢で男性で、94％ぐらい。60前後の男性しかいない施設というのはいびつでしょ。それは地域とはいえない。できれば第二段階で抱樸の施設の中に、子どもであるとかいろんな人がそこで総合的な支え合いなり複合的な施設をできればいいなあと。抱樸館に関しては大分今本気になっています。

今までの日本のホームレス支援というのは2002年にホームレス自立支援法ができて、日本の戦後の中で、ホームレス問題に対して国が立ち上がったというのはこれは非常に画期的なことです。でもわたし、この９年間を見てて、ホームレスの支援の第一期は終わったと思うんです。ホームレスの支援の第一期はなんだったかというと、ともかく緊急支援です。今日食べれない人をどうするか、要するに生存権に極めて近いレベルの支援。この９年を経て次の時はどう考えるかといったら、たとえば小倉の「自立支援センター」をつくったときに、それまでの全国の自立支援センターは全部相部屋で、蚕棚です。政策段階から関わったことの１つの成果だったんですけれども、わたしはこれには絶対反対した。そんな蚕棚を今更するんだったら俺たちはもう参加しないとへそを曲げた。そしたら全部個室にしましょうということになった。それでも最初は全部カーテンで。個室なのにそれはおかしいというと、次にアコーデオンカーテンでと言いだして、それもおかしいというとやっとドア。ところが今度は鍵がない。何でといったら、いや、立てこもったらどうするのかと。そんな風に考えてるから駄目なんよと。彼らのプライバシー、鍵を預けるということはこっちからまずボールを投げる。こっちが不信感で見ている限り向こうも信じてくれない。だから鍵を預けるんよ、絶対立てこもることはない、と。実際ないですよ、そんなこと。こっちから裏切ったら、彼らは責任を果たせない。

そのときの議論のレベルは、路上よりこっちの方がまし、そういう話だったですね。だけど今からの支援はそれはもうだめだと思うんですよ。今までの感覚からいったらこんな立派なホームレス支援施設を建ててどうするのといわれるくらいのものをつくる。社会は皆さんを見捨ててはいないし、皆さんのことを期待してますよと、特に若い連中に。これでもかというぐらいに暖かい施設をつくる。あとはその代わり人を助ける人になれよと。だってたとえば大阪などの施設は今でも蚕棚で、あんなとこで半年間生活しても、「こんなところに押し込めやがって」というのが正直なところ。けれどもこれでもかというぐらいに社会の責任を果たして、その代わり「あんた自分の責任を果たせよ」と、真剣に勝負できる施設をつくらないと。僕今自立支援センター見てて、当時はいい施設だ、よくぞここまで来たと思ってましたけれども、今やね、この部屋で半年過ごすのはきついやろな、僕だったら嫌だな、入りたいとは思わないな、と思う施設ですよ。一回見てきてください。ほんとにこれじゃ駄目だと思う。

だから今回つくるのは、ほんとにきちっとしたバッチリのものをつくって、その代わり真剣に勝負をかける。「おまえの人生それでいいのか」という、「これだけ社会が助けたのにおまえは

人を助けないのか、それでも人間か」、という話ができるものをつくらない限り、なんかこう中途半端にマイナスを埋めるみたいな支援はね、もう日本の福祉のレベルを下げるばっかりだと。もっとすごいものをガチッと支援することによって、彼らが次にどう責任を果たすかというのを期待したい。それが「抱樸館」ですね。「自立支援センター」というのは税金を使って造った施設だから贅沢なものはつくれない。最低限のもので抑えるというのがやっぱり税金の発想だと思うんですね。民間がやるんだから最高のものをつくろうと。お金はちっとも集まらないけどなぁ。5000万といってて今まだ1500万ぐらいしか集まっていないです。絶対集まると思ってやっているんですけれども。何とかせにゃいかんですね。

5　地域の福祉社会づくりとホームレス支援機構

［山﨑］　最後に、そのようなかたちで新しい抱樸館を目指していくとしますと、当然地域との関わりがますます大事になってきますし、すでに自立を果たした人たちがどのようにして地域社会での生活に復帰するかということが重要な課題の１つになっていると思います。ホームレス支援機構では早くから「ホームレスを生まない社会」をめざすことを活動目標の一つとして掲げてこられましたが、トータルサポート体制を構築してこの目標を達成するには、地域の市民組織、企業、行政組織など、社会を構成するあらゆる要素がそれこそトータルに取り組まないと難しいだろうと思います。たとえば社会福祉協議会では「ふれあいネットワーク」事業を20年近くやっていますし、行政は１昨年から「いのちをつなぐネットワーク」事業を展開していますが、こうした地域の動きとの関連で、ホームレス支援機構の生活サポートの活動を地域でどのように組み立てていこうと考えておられるのか。あるいはむしろ、そうした既存のネットワークを超えたもっと総合的な支援システムが必要だと考えておられるのか。いまではおそらくこうした既存のソーシャル・サポート・ネットワークにはそれぞれ限界があって、それらを横につなぐようなことを考えていかないと、さらに前に進むことはできないように思えます。先ほど、いちばん最初にグランド・プランをお考えになったときに企業も行政も含めたプランを実は構想していたんだとおっしゃっておられましたけれども、それをどう具体化していくかということが、今、北九州でおそらく一番大事で、それこそグランド・デザインをもう一度考え直す時に来ているのではないか。北九州ホームレス支援機構がこれまでホームレス問題を切り口に地域福祉の問題を深く追求してこられましたが、これを全市的な、地域社会全体の福祉社会づくりにどうつなげていくかという、非常に重要な段階に来ているとわたしも思うんですけれども、この点についてのお考えあるいは構想といったものをお聞かせいただければと思います。

戦後社会保障制度の崩壊

わたしは戦後の福祉、特に社会保険制度も含めて、社会保障制度は、実は今もう崩壊したと思っています。戦後の社会的なそういうシステムの中核を担ったのは、わたしは企業社会だと思います。企業社会がすべてを網羅してはおりません。わたしは大阪の釜ガ崎を見てきましたから、企業社会の外にいた人たち、アウトサイダーたちの姿を見てきましたから、企業社会を万全だとは全然思っていないんで。ただ、総労働人口比でいうと多分当時90％以上の人たちが企業の終身雇用体制の中で企業社会が家族にいたるまで、たとえば保険制度、家族全部扶養義務、そういう意味で30年スパンないしは40年スパンで社会的なバックアップをしていた。これが95年の経団連の「これからの日本的経営の指針」というあの有名な方針が出て97年に派遣（労働）が自由化され

る。その流れの中で、労働人口が4500万ぐらいの中で1500万ぐらい、３分の１ぐらいが非正規にいくという現状になった。今、もっと多いかもしれません。2000万ぐらいいってるかもしれません。こないだ、経団連の御手洗さんがテレビで連合との話し合いをやってましてね、今年は定昇なし、ベアなしと喧々諤々やってた。御手洗さんは、そうでなくても今企業は全体で600万人の不要就労者を抱えているというようなことをいってた。今日本の完全失業者は多分400万人くらいいます。御手洗さんの言い方だと600万人くらい要らんやつを雇ってると。そうなると1000万人要らんという話になるわけですね。そうでなくとも1500万の非正規に、さらに600万要らないという話になってきて、さらに400万の人が失業しているんで、むちゃくちゃな話になる。これは完全に崩壊している。

これまでは結局企業が全体の７割８割をカバーして、どうしてもカバーできなかった、いわゆる資本主義経済がカバーできなかったところを補完するのが社会保障制度だったと思うんですね。だから国は最後のセーフティネットだけ構えていればよかったというのが実情だったと思うんです。だけどその大本の企業社会がつぶれた中で、社会保障制度が最後にはもう追いつかなくなった。だから今からは民間も含めて地域が一体化してシステムを再構築しないといかん時にもう来たと思うんですね。ですから、そういう意味では、旧来の社会保障の最低限の制度であるセーフティネットで生活保護のみで対応しようとすると、従来補完だったものが今メインストリームに出てきたときに当然社会保障費が追いつかない。企業収入も落ちてるわけですから、全然追いつかないという話になる。だから、やっぱり生活保護制度も含めて今見直すときに来ていると思うんですね。それが一つ、大前提になる話ですね。

「つなぎ」の問題

もう一つは、これからどうして体制をとるかという話で、国も地方も地域も住み分けなり協働体制を取らないかんという話。それにしてもですね、福祉は受け皿だと思うんです、ほとんどの部分。施設であったりとか、全部受け皿ですね。介護保険制度も受け皿ですし。で、受け皿として「包括支援センター」ができて障害福祉と高齢者福祉が一体化したことは画期的でよかったんだけれども、じゃあ現場ではどういうふうな作業をしているかというと、多分多くの場合は、ご本人を外において包括支援センターと家族とでこの人の処遇をどうするかを話し合ったと思うんです。介護保険入れましょうとか施設に入れましょうとか。うちの場合はここにサポートセンターが入る。でもこのサポートセンターがない人もいる。つまり申請主義が長く続いている中で、いわゆる家族がいわば代理申請してきたところが今はもう成立しない。本人は、先ほどいいましたように、無縁無知の中におかれていますから、権利行使すら分かっていない。こういう制度があってこういうことができるということもわからない。今の日本のお年寄りたちは、制度的にいうと、老齢基礎年金は最低基準以下ですから、全員が生活保護を申し込んだら、捕捉性の原則で莫大な生活保護費が請求される。これは正当な権利だとなる。けどまさか自分が生活保護費をもらえるとは思っていない人が多い。そういう中で、良くも悪くも困窮孤立者というのは無縁無知化している。

今たとえば湯浅誠君なんかとよく話しますけどね、彼が一生懸命政府に入って受け皿、新しい制度をつくった。けど何が一番欠けてるかというと、実はソーシャル・キャピタルをどうコーディネートして使うかということを客観的な視点である程度みてくれ、交渉もしてくれる機関で

す。たとえば子どもが病気になってお母さんが病院に連れて行く。よくなったら連れ戻す。戻ってきた子どもを学校に連れて行く。終わったら学校から連れ戻す。次は地域に送り出す。つなぎ戻しつなぎ戻しの連続が実は家族、家庭の役割なんです。この家族・家庭が崩壊したときに受け皿に一旦つながれるとそこでとどまってしまう。要するに、実態的には「つなぐ」になっていない。「投げ渡し」だ。たとえば困窮孤立の状態の人が救急車で運ばれたら病院に投げ渡す。病院はたとえば早ければ2週間、長く置いても1ヶ月ぐらいで出ろといわれますから、次の病院に投げ渡す。そうすると、その患者さんが次の病院でどういう処遇になっているかはだれも把握していない。そして次の病院にいっちゃう。次の病院でも長くて100日で次は退院。今度は老人施設。こういう中で、家族がいたら、ここからここの病院に移った場合に、どうもこの病院は医者も悪いし看護婦の態度も悪い、こんな病院はだめだといって次の病院に換える。これがコーディネート。この家族が抜け落ちたとき、「つなぐ」といっているけど実は「投げ渡された」当事者が行った先が貧困ビジネスの施設だったら、「たまゆら事件」（2009年3月「静養ホームたまゆら」の火災で入所者10名が死亡した事件）が起こって焼け死ぬわけですよ。本来家族は監視役でもあったしコーディネートでもあった訳ですね。監視とコーデイネートという役割が抜け落ちた社会は、自己責任論がはびこって個人の責任に矮小化されてしまった社会です。

伴走的コーディネート体制―「絆の制度化」に向けて

今度抱樸館をつくるにしても、これは一つの受け皿ですね。市が持っている受け皿、地域が持っている受け皿、そういう社会的な資源というのはいろいろあるんだけども、福祉において一番ないのは専門の、持続性のある伴走的コーディネート。もっと単純な言い方をすると、旧来家族がになってきたコーディネートの役割を社会保障の中に組み込まない限り駄目だ。それは投げ渡しになってしまって、たとえば一旦生活保護をもらったらずっともらい続ける。次のステップへとコーディネートする人がいないからですよ。投げ渡しの福祉です。それでやってしまうと、最終的には全部社会保障制度にたまってしまって、社会保険制度に戻れない。社会的な還元の還流に戻れない。そういう弊害も出てきてしまうんで、わたしは今、日本全体の問題として厚労省の中でもよくそんな話をするんですけれども、伴走的コーディネートを公的システムとしてつくる。

もっと変な言い方でいうとね、これわたし、奥田さんがそんなこというんですかと怪訝な顔をされるんですが、「絆を制度化する」とこの頃言っとるんです。絆なんてものは制度に合わない。絆なんていうのは人と人との心の関係だ、それが北九州のホームレス支援機構の真骨頂だ、とみんな割と理解されている。そんなことをずっと言ってきた人が「絆を制度化する」なんていう、そんなこと言っていいのかといわれるのですけどね、わたしは今あえてそういう言い方してまして、そこまで今絆がとぎれた。そして、旧来の家族や地域という地縁・血縁の絆に戻せるかというと、もう戻せない。そうすると、赤の他人が絆を結んでいけるための公的な支援を、ある意味バイアスをかけるような絆創造のシステムを今つくらないと、中には困窮者を利用して金儲けしようと思っている変な人たちもいるわけで、こういう施設に投げ渡されたら、もう一巻の終わりですよ。そこで死ぬしかない。だから、悪い施設からは出す。そういうところへは人を回さない。そういう監視の役も含めたような、持続性のある伴走的コーディネート体制というものを社会的枠組みとしてつくる。言い方を換えれば「絆の制度化」ということをやらないかん。

だからホームレス支援機構の来年度の理事長方針に出しているのは、今のうちの組織図からいくと、センター事業部、施設事業部、生活サポート部、それからボランティア部、あと総務部、この５つの部で動いているんですね。ここに40人ほどのスタッフが有給で動いてて、ボランティア部は完全にボランティアで動かしてて、ここは80人ぐらいの組織になっている。けどわたしこの間ずっとやってて、トータル・コーディネートをする、つまり、路上段階からお葬式に至るまで、トータルなサポートのコーディネートをする部署を立ち上げて、受け皿とコーディネートを明確に分けていくというスタイルをホームレス支援機構の中に実験的につくれないかと。このごろ、特にこういう時代に入ってきて、やっぱりそれは必要なんじゃないかなとすごく思っているんです。ですから伴走的コーディネートというものを社会的に保障する、それによって社会保障制度一辺倒、つまり、生活保護一辺倒の福祉を脱する。そんなことを今ちょっと夢見てるわけです。

［山﨑］　わたしも、そういう制度設計はどうしても必要だと思います。要するに行政的縦割りを超えたところでの制度設計は誰もしない。民間から声を上げない限り、行政が縦割りを超えた、あるいは行政と民間あるいは企業との関係の制度設計というのはなかなか行政からは言い出せない。しかしそれができないと、おっしゃるように、生活保護を始めると自立できる人まで生活保護で固めるような流れがあったりします。そうじゃなくって、お互いがより豊かな人生を歩めるためには新たな制度設計が必要になる。

われわれもずっと、自立支援ではなく人生支援であるといってきた。そういうことだと思います。その人にとっては保護だけ、医療だけ、就職だけじゃなくって全部いるんですよね。トータルな人生設計というものが。多分、たとえば母親は息子に対してそういう目で見ていただろうし、父親はそうやって見ていただろうし、そういうものが昔はあった。しかしそれはあまりにも狭くって、何か事件が起こったらある特定の人にむちゃくちゃな負担がかかって、息子であっても二度と帰ってくるなとなっちゃって。それを何とか社会的にとどめないといけない。それができないと、たとえばこの間起こったような、追い詰められた若者たちの「誰でもよかった」式の事件というのは回避できないんじゃないか。あの孤独さはたまんないですね。どんな理由があっても下関の駅に火をつけても秋葉原で暴れてもあかんし土浦の駅で人刺してもあかんし、自殺も絶対駄目なんだけれども、でも、じゃあ、あの日の夜、76歳の福田とう被告は、刑務所から出てきて10日目で、お金も一円もなくって、火をつけたらいけないということは教えられても、じゃあ何をすべきだったのかということをこの社会が教えられるのか。そのことを彼に言えるのか。僕はやっぱり、変な責任感かもしれないけど、「しまった」と思ったんですね、あの時、やっぱり。なぜかというたらあの日火をつける６日の日まで小倉にいたんですよ。僕ら３日の日に炊き出ししてるんです。あの時出会ってたらこうなってなかったんじゃないかという責任というか、しまったという気が強くって。だから、そこのところはトータルにコーディネートするという発想を持たないと、自分の範疇を通過してもらうことだけ考えているような制度設計はもうだめだと思う。

［山﨑］　結論的に言えば、そういうトータルな伴走的コーディネートによる社会的リスクマネジメン

トということですよね。それを目指して北九州もどうして行くかということをもう少し議論する必要がありますね。それこそ保護課は保護課、いのち課はいのち課、社協は社協、それぞれ一生懸命やっているんだけれども、うまくつながっていない。

そうそう。誰も悪い人はいないんだけれども、やっぱりコンダクターみたいな人がいるんじゃないかという、トータルで指揮する人がいるんじゃないかなぁと思いますね、僕は。

［山﨑］　貴重な時間を有難うございました。

（やまざき　かつあき　北九州市立大学名誉教授；北九州市社会福祉ボランティア大学校校長）